

私を裏切った元家族の皆さま。

断罪される準備はよろしいですか？



サブル

カステラン王国の
王太子。良くも悪くも
かなり純粋。

ラーナ

シアリンの姉。
シアリンではなく自身が
予知夢を見ている、
と言い出した。

フィナ

シアリンとラーナの祖母。
シアリン以外の人の
ことを忘れている。

ティズ伯爵

シアリンとラーナの父で
伯爵家当主。
とてもお金が好き。

シアリン

予知夢を見ることができる
伯爵令嬢。普段は
予知夢で起こる悪い
出来事を回避するために
奔走している。

ジェリク

トレジット公爵家の嫡男。
一途な性格で、
シアリンに長く想いを
寄せていた。

イチゴ・ ハッピー

かつてシアリンが
助けた犬と、
その子。

Characters

目次

私を裏切った元家族の皆さま。

断罪される準備はよろしいですか？

番外編 予知夢を見られる私だけにできること

私を裏切った元家族の皆さま。

断罪される準備はよろしいですか？

プロローグ

「そんな……、どうしてジェリック様が？」

お姉様がずっと片思いしていた相手は、私、シアリンの目の前に立つ彼、ジェリック様です。

彼女は彼と結婚したがいのために私を陥れ、そのせいで私は王家から嫌われ、王太子殿下に婚約破棄されました。それだけではなく、両親からの愛情をも奪われたのです。

でも、今の私は幸せです。王家から嫌われ、婚約破棄され、両親からの愛情を奪われたおかげで、私を必要としてくれる人を見つけることができたのですから。

今日は私とジェリック様の結婚式で、教会には親族など多くの人が集まっています。

「外野がやかましいな」

「そうですね」

ジェリック様と苦笑していると、お姉様が訴えてきます。

「どうしてあなたの夫がジェリック様なのよ！ ジェリック様もなぜシアリンを選ぶの!？」

「……リブレット男爵というのは、ジェリックのことだったのか!」

壇上に立つ私たちを、お姉様と私の元婚約者である王太子殿下が、驚愕の表情で見つめています。

した。

お姉様の様子を見て、今までの仕打ちで辛い思いをしていた私の胸は、ちょっとだけスッキリしました。

……と、この状況に至るまでに何があったのか、過去のお話をしないとわかりませんよね。

では、私たちの過去を振り返りましょうか。

ワッフルン大陸の東に位置するカステラン王国は、ムドリーという神様を信仰する民が多く、よく神秘的なことが起きる国だと言われています。例を挙げましょう。

周囲に止められたにもかかわらず、川にゴミを投げ捨てた人がいました。非難されても悪びれる様子はなく、拾えと言われても拾わなかったその人は、すぐさま川の中に引きずり込まれ、ゴミと一緒に下流まで流されたのです。

カステラン王国は、悪いことをしなければ危険は少ない国です。治安も良いですし、食べ物も美味しく、療養地としてとても人気があります。

綺麗な湖に、それを囲む青々とした木々。耳に心地よい鳥の鳴き声。年老いた周辺国の貴族の多くは、この国に別荘を買い、余生を過ごす人が多いのです。

そんなカステラン王国の伯爵家の次女として生まれた私、シアリン・テイズは、幼い頃からおよそ十日おきに予知夢を見ることができました。

私は特に不幸な出来事の予知夢を見ることが多いのですが、その未来が起きないように介入することができません。

——それなら、すべての人を助けられるのでは？

そう思うところですが、そううまくはいきません。

多くの人に当てはまると思いますが、夢つてすぐに忘れませんか？

私は特にその傾向にあります、起きてすぐは覚えているのですが、少し経つと強烈に心に残った夢以外は忘れてしまうため、文字を知らなかった頃は人に伝えているうちに忘れてしまっていました。

私の能力に気がついた専属メイドが、私の話をメモするようになってからは、すべての人ではありませんが、多くの人の不幸を回避することができるようになりました。

初めて不幸を回避したのは、どこかの貴族が飼う犬を助けたときです。

犬の名前はイチゴちゃん。黒とこげ茶色の毛を持つ小型犬です。

イチゴちゃんが馬車にはねられる夢を見た私は、ちょうど記憶にある場所だったので、慌ててそこへ向かいました。

すると、リードを付けた状態で走り回る小型犬を見つけました。あの時のイチゴちゃんはまだ子犬で、とてもやんちゃでした。

夢の中で、動かなくなっていたイチゴちゃんを飼い主の男の子が抱いて号泣していたのを思い出し、私は「イチゴちゃん、おいで！」と呼んでみました。

イチゴちゃんはしっぽを振って寄ってきてくれ、ちょうどその直後、イチゴちゃんがいた場所を馬車が通りすぎ、事なきを得ました。

この話を使用人たちが伝えたことで、半信半疑だった両親は私が予知夢を見られるということを知りてくれるようになりました。

夢で見たものを伝え、父が阻止するために動く。

そんなことを続けていたところ、十歳になったある日、その行動が認められ、両親下に謁見する機会が与えられたのです。

初めて見たカステラン王国の王城は、おとぎ話に出てくる白亜のお城にそっくりで、エントランスへ向かう最中に見えた三本の尖塔のどれかに、悲劇のお姫様が幽閉されているのかも、なんて想像して、勝手にワクワクしていました。

国王陛下に謁見をしたあとに案内された庭園のガゼボで、私より二つ年上のカステラン王国の王子殿下であるサブル・レハート殿下と出会いました。

金色のサラサラの長い髪を一つにまとめた彼の瞳は、晴れた空を思わせる青色で、サブル殿下の美しい顔立ちをより一層際立たせているように思えます。

そして、サブル殿下の隣に、これまた美少年が立っていました。

彼はジェリク・トレジットという公爵令息で、サブル殿下の友人だそうです。

艶のある黒色の髪と、深紅の瞳がとても綺麗です。髪が長ければ、クールな美少女に見えそうなくらい、綺麗な顔立ちをしていました。

……ジェリク様とは初めて会ったはずですが、見覚えがあるような気がします。ああ、いけません。ずっと見ていると失礼ですね。

我に返り慌ててカーテシーをすると、サブル殿下が爽やかな笑みを浮かべました。

「はじめまして。僕はサブルだよ。君はこの国にとつて救世主みたいなものだと言っている。これから予知夢の力を国のために使ってほしい」

「はじめまして。シアリン・テイズと申します。もったいないお言葉をいただき、大変恐縮です」

噛まずに言えた自分を褒めてあげたいと思っていると、ジェリク様がこちらを睨にらんでいることに気づきました。

「あ、あの、何か？」

「何でもない。気にしないでくれ」

ジェリク様は視線を逸らし、どこかに行ってしまうました。

両親から、ジェリク様とも仲良くなるように、と言われていたのですが、なぜか嫌われてしまったようです……

「彼に悪気はないんだ。許してあげて」

「いえ、むしろもしかしたら私が何か失礼なことをしたのではないかと不安になってしまっ
て……」

「そんなんじゃないよ。彼はただ無愛想なだけだ。いつもと様子は違った気がするけどね」

濃い紫色のストレートの髪にレモンのような黄色の瞳を持つ私は、昔から姉に比べて地味な顔だと言われてきました。

そんなこともあって、この時の私は、自分の容姿が整っていないせいで嫌われた、と思い込んだ

のでした。

「仕方のないことです。きっと、私が可愛くないからでしょう」

「そんなことない。シアリンは可愛いよ。それに、ジェリクは自分の好みの顔じゃないからという理由で冷たくするような人じゃない」

「そうなのですね。それは失礼いたしました」

頭を下げると、サブル殿下は私の手を取って優しい眼差しを向けてきました。

「シアリン、僕の婚約者になってくれないか。絶対に幸せにするから」

「わ、私などで良いのですか!？」

「もちろん。予知夢を見られる君は普通じゃない。僕にふさわしいよ」

今考えれば失礼な発言ではありますが、この時の私は優しい笑みを浮かべるサブル殿下に簡単に恋に落ち、彼に愛されるために、より精進しようと奮起したのでした。

サブル殿下と私の婚約が決まると、私が予知夢で見た内容を書いていた紙は王家に譲渡され、新しい紙も書き終えるなりすぐに両親に渡り、王家に送られることとなりました。

調べてもらったところ、予知夢について少しかわかったことがありました。

予知夢で起こる出来事は、私とその夢を見てから次の夢を見るまでの間に起こるものようです。

しかしそれがいつ起こるのか、というのはわからず、予知夢の中の天気や太陽の位置などで推測するしかないとのことでした。

雨が降っていたり、特徴のある場所で起きたりするのならわかりやすいのですが、そう簡単にはいきませんね。

そして予知夢で見た出来事に干渉するには、それが起きる前に、私が何らかの形で接触しなければなりません。

「王子様と婚約だなんて、シアリンが羨ましいわ」

そう言ってくれたのは、二つ年上のラーナお姉様でした。

お姉様は、金色の髪にピンク色の瞳を持つ、妹の私から見てもとても可愛らしい少女でした。予知夢を見られる私を誇りに思ってくれていて、幼い頃からとても仲が良かったのです。

私がお姉様のこと大好きで、予知夢についてよく話していたものです。そのこともあってか、お姉様も私ほどではありませんが予知夢を見られるようになりました。

両親が詳しく調べてみますと、どうやらお母様のご先祖様に未来を予言できる方がいらっしやっただそうで、その血を受け継いでいるからお姉様も見られるようになったのだそうです。

「これで私も誰かの役に立てるかしら!」

嬉しそうなお姉様の顔を、私は今でも覚えています。

——そんな私たちの関係が変わったのは、私が十一歳の時でした。

誰かが不幸になる未来を少しでも良いものに変えようと、学園に通いながら奔走していた私は、

過労で倒れてしまったのです。

サブル殿下が私の体調を気遣って、お屋敷まで見舞いに来てくれたのですが、その時、ジェリク様も一緒に来てくれました。

お父様自らが二人を案内し、たまたま私の部屋にいたお姉様は退出しようとしたのですが、その場に残ることになりました。

サブル殿下とジェリク様のために椅子が用意され、二人は私のベッドの傍らに座り、お父様とお姉様は二人を見守るかのよう背後に立っています。

「心配をおかけしたようで申し訳ございません。体調が悪いため、このままの状態でお話しすることをお許しください」

ベッドに横になっただけで言うと、サブル殿下は苦笑します。

「大勢で来るものではないとわかっているんだけど、ジェリクが君のことをすごく気にかけていたから連れてきたんだ」

「そうだったんですね。お気遣いいただき、ありがとうございます」

ジェリク様に頭を下げると、彼は口元に笑みを浮かべました。

「元氣そうで良かった。婚約者でもないのにここに来たんだ、俺はこれで失礼するよ」

「いいえ！ せっかくだのでゆっくりしていつててください！」

気にかけてくれるわりには、ジェリク様は視線を合わせてくれません。やはり私は嫌われていて、私の弱っている姿を笑いに来たといったところでしょうか。

「殿下、ジェリク様、シアリンのためにご足労いただきありがとうございます」

満面の笑みを浮かべたお父様は、お姉様を紹介しました。

「シアリンの姉の、ラーナです。とても良い子なのですよ」

この時のお父様は、あわよくばジェリク様がお姉様を婚約者に選んでほしい、という思惑があったのだと思います。

ですが、挨拶を返したジェリク様はまったく興味を示さず、どちらかというと、サブル殿下のほうがお姉様を気に入ったみたいでした。

この時、どうやらお姉様はジェリク様に一目惚れしたようです。

転校してジェリク様たちと同じ学園に通いはじめ、昼休みになると必ず会いに行つて声をかけたりするなど、猛アタックしていたようです。

お姉様がジェリク様に相手にしてもらえない日々を送っていたある日のこと。

サブル殿下がジェリク様を連れて、再びお屋敷を訪ねてきたのです。

ちょうど一緒にいたお姉様も話をしたいと言いはじめたので、確認すると許諾してくださったため、私の部屋で話すことになりました。

サブル殿下たちにパッチワーク柄の二人掛けのソファへ座ってもらい、私とお姉様は、木製のテーブルをはさんだ向かい側のソファに座りました。

メイドがお茶を淹れ終わって出ていくと、私の正面に座るサブル殿下は笑顔で話しはじめました。

「ジェリクは予知夢を見られるシアリンに興味があるみたいなんだ」

「予知夢が見られる人間なんて、珍しいですよものね」

微笑みながら頷くと、ジェリク様が申し訳なさそうに頭を下げます。

「迷惑をかけてすまない……殿下がそう思い込んでいただけなんだ」

「とんでもないことでございます。ですが、せつかく来てくれたんですもの、何か聞きたいことがあればぜひ聞いてください」

「あ、ああ。それでは——」

「あの、予知夢にご興味があるのなら、私がお話しできますわ」

ジェリク様の言葉を遮ったのはお姉様でした。しかしジェリク様の対応は冷たいものでした。……というよりは、彼はいつもこんな調子ですので悪気はなかったのかもしれないが。

「別に、君には聞いてない」

「で、ですが、シアリンに興味があるというのは、予知夢が見られるからですよね？」

「興味があるなんて、俺の口からは言っていない」

「……っ！ 申し訳ございません！」

「謝ることじゃないし、君を責めているわけじゃない。言い方が悪かったのなら謝る」

ジェリク様が頭を下げると、お姉様の頬が赤くなりました。いつもクールなジェリク様の表情が焦ったものになったため、そのギャップが魅力的に映ったのかもしれない。

「ラーナ嬢はとても可愛いし素敵だね。予知夢が見られるだけじゃなく、顔が可愛い上に性格も良いなんて。僕の婚約者はラーナ嬢でも良かったかな」

……もしかして、殿下はお姉様と婚約したいのでは？

そのことに気がついた私は深く傷つきましたが、顔には出しません。すると、私の考えを裏付けるかのように、ジェリク様は渋い表情で口を開きました。

「殿下が本気でそう思われるのであれば、国王陛下に婚約者をラーナ嬢に交代してもらおうよう、お願いしてみてもいかがでしょうか」

「うーん。そういうつもりじゃなかったんだけど、どうしようかな。ジェリクとシアリンはとてもお似合いな気がするし、父上に話してみるよ。予知夢が見られるのなら誰でもいいみたいだし」

そう話す殿下は、笑みを必死に堪えているように見えました。

あとからジェリク様に聞いた話では、お姉様が背後から私を睨みつけていたようです。この時の私はショックを受けていて、それどころではありませんでしたが。

結局、国王陛下はその提案をお認めにならなかったものの、サブル殿下のその発言はお姉様が私を憎む引き金となり、この時からお姉様は私を陥れるために動きはじめたのです。

サブル殿下の問題発言から数日後。

お父様は私をモンブラン湖の畔ほとりに連れていきました。

モンブラン湖は屋敷から馬車で一時間程の場所にあり、観光地として有名です。

少し歩くと賑わうエリアがありますが、このあたりは木々が多く滅多に人が来ません。予知夢

の一つに湖の近くのものであったので連れてこられたと思っていたのですが、どうやら違ったようです。

「お父様、この場所ではないと思うのですが……」

「シアリン、お前は王太子殿下との婚約を破棄しようとしているらしいな」

「いいえ。私ではありません！ サブル殿下が——」

「言い訳するな！」

お父様は温和な笑みを消してそう叫ぶと、私を湖に突き飛ばしました。水深が浅かったので溺れることはありませんでしたが、ダメージは大きいです。

さらに助けてくれる様子がなかったので、自力で湖岸まで這い上がると、お父様は私を見下ろして睨みつけてきました。

「いいか、シアリン。これは勝手な真似をしたお前への罰だ！ こんな目に遭いたくないのなら、

二度とラーナの邪魔をするな！」

「……わ、私が何をしたと言うのですか!？」

「お前は王太子殿下と婚約しているというのに、ジェリク様を誘惑し、殿下をラーナに押しつけようとしたのだろうか？」

「そんなことはしていません！」

「うるさい！ 口答えをするな！」

お父様はその場でしゃがみ、私と視線を合わせて続けます。

「お前だって私の大事な娘なんだ、本当はこんなことはしたくない。だが言うことを聞かないのだから仕方がないだろう。これは愛のある騷だ」

「……愛のある騷？」

ただの虐待を良いように言っただけでは？

そう思いましたが、これ以上怒らせても何の得もありませんので、口には出しません。

「帰るまでに誰かに会って、どうして濡れているのか聞かれたら、自分から湖に落ちた、と答えなさい」

そんな横暴な命令であってもお父様に逆らえるはずもなく、黙って頷くと「それでいい。あとは、目をつぶって反省しながら百まで数えなさい」と言われました。

素直に目を閉じ、百を数え終わって目を開けるとお父様の姿はありませんでした。私は慌てて馬車を降りた所まで急ぎます。

「お父様が言うようなことはしていません！ 誤解なんです、信じてください！」

そう叫び、泣きながら草をかき分けて走りましたが、馬車の姿はどこにもなく、途方に暮れてしまいました。

「……どうしたらいいのでしょうか」

誤解されるようなことはしていませんし、お姉様を婚約者にしようと言ったのは殿下です。……と言っても無駄なのでしょうね。

ここで反省しながら待っていれば、お父様は迎えに来てくれるのでしょうか。

モンブラン湖は湖水浴で有名な湖です。しかし今はシーズンではなく湖水浴を楽しめる気温ではありませんから、助けを求めて普段人で賑わうところに行ったところで、人の姿は見当たりません。

体が冷えてきて寒くなってきました……どうしましょう……

そう途方に暮れながら、びしょ濡れの状態で立ち尽くしていると、遠くから馬車が近づいてくる音が聞こえてきたのです。

お父様が迎えに来てくれた、と期待に胸を膨らませましたが、うちの家のものとは比べ物にならないくらい豪華な馬車で、御者もいつもの人ではありません。

がっかりして馬車道の端を歩きはじめると、そばを通りすぎたばかりの馬車が停まりました。

——湖を見に来た方でしょうか。

立ち止まって見ていると、御者が降りてきて急いで扉を開け、すぐに馬車から男性が飛び出してきました。

「どうしたシアリン嬢、大丈夫か!？」

その男性は、ジェリク様だったのです。すごいタイミングです。こんな風にお会いすることもありません。

ジェリク様は心配そうな顔で、私のもとに駆け寄ってきました。

「……ジェリク様、ごきげんよう。お会いできて光栄です」

必死に笑顔を作ってカーテシーをすると、ジェリク様は上着のポケットからハンカチを取り出し

て、私の顔に当てます。

「どうしてこんな所に一人でいるんだ？ それに、雨も降っていないのに濡れているのは、なぜだ？」

「……湖に落ちました」

「なんだって？ どうしてそんなことになるんだ……いや、それよりも怪我はないか？」

ジェリク様は私のことを嫌っていると思っていました、そんなに必死に心配してくれるなんて。なんだか嬉しくなって、私は微笑んでかぶりを振りました。

「ないです」

「笑い事じゃないだろう!」

ジェリク様は声を荒らげながら私の手を取ると、停めてあった馬車まで連れていきます。すると、馬車の中から、今度はとても美しい女性が飛び出してきました。

「びしょ濡れじゃない! 何があったの!？」

ジェリク様と同じ髪色と瞳を持った、私よりも少し年上に思える可愛らしい女性は、慌てた様子で私に話しかけてきます。

その女性——なんとジェリク様のお母様でした——は、遠慮する私を馬車に乗せて夫である公爵閣下を外へ追い出すと、メイドにこれ以上冷えないように下着以外の服を脱がせ、体を拭くように指示をしました。

その後、買い物したばかりだという奥様の服を着せてもらい、ブカブカではありましたが、体も

心も温かくなりました。

それと同時に、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

「ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ございません」

「私たちのことは気にしなくていいわ。それよりも何があったの？ どうしてあなたはびしょ濡れのまま一人でモンブラン湖にいたの？ あなたの両親は何をしているのよ！」

「お父様と一緒にだったのですが、その……湖に落ちました」

「どうしてそんなことになるの！ それに、あなたのお父様はどこにいるの！」

「ご、ごめんなさい」

本当のことを言えずに謝ると、奥様は私を抱きしめてくれました。

「私こそ興奮してしまつてごめんなさい。あなたは悪くないのよ」

奥様の温かさに涙しそうになっていると、コンコンと扉を叩く音が聞こえました。

奥様が返事をするので扉が開き、童顔の美形だと有名な公爵閣下が姿を現しました。

中の話が聞こえていたのでしょう、公爵閣下は後ろで一つにまとめたシルバードブロンドの髪を揺らし、濃い緑色の瞳を私に向けながら肩をすくめました。

「察してあげなよ。きつと本当のことを言うなと言われたんじゃない？」

「……どうということ？」

奥様は聞き返したものの、すぐに意味を理解して怒りはじめます。

「信じられないわ！ 湖に落として放置するなんて、どういふつもりなのかしら！ 殺人未遂だ

わ！」

「ここに来る時にすれ違った馬車はテイズ伯爵のものだろう。もう少ししたら様子を見にくるかもしれないから、場所を移動しよう」

「えっと、あの！」

公爵閣下たちのお気遣いはとても嬉しいのですが、お父様が私を湖に落としたことが公爵閣下たちにバレれば、私は家から追い出されてしまうかもしれません。ポジティブに生きているつもりですが、さすがに一人で生きていくのは難しいです。

そう言おうとすると、公爵閣下は馬車に乗り込みながら私の頭を撫でてくれました。

「大丈夫だよ、シアリン嬢。ちゃんと家に帰してあげるから、心配しなくていい。だけどその前に、僕が君のお父さんと話をしたいだけなんだ」

公爵閣下はそう言つて微笑みましたが、その目はまったく笑っていませんでした。

そしてジェリク様も乗り込むと、馬車は動きはじめました。

どうしてジェリク様たちがモンブラン湖の近くを通つたのか聞いてみると、近くにある公爵家の別荘に向かうつもりだったと教えてくれました。

奥様の買い物に付き合つて疲れ切つたジェリク様と公爵閣下を休ませるために、別荘で休憩しようと考えていたそうです。予定していたわけではなく、たまたまらしいので、どうやら私は運が良かったみたいです。

助けてもらえたという安心感もあつたのでしょう、こんな時だというのに馬車の揺れが心地よく

て眠くなってきました。

ああ、駄目です。こんな状況で眠るなんて駄目です！

しかし眠気には勝てず、いつの間にか眠ってしまった——が、予知夢を見て飛び起きました。

夜以外に見るのは初めてです。

それに、いつもの予知夢は断片的なシーンがいくつも連続しているのですが、今回は違い、一つのしつかりとした夢でした。

見覚えのある男性が、行商人を装った賊に殺されてしまう夢です。なぜ行商人を装ったとわかったかという点、商品が載ったリアカーが見えたからです。

そこは緑の多い景色で、そばには湖がありました。

「怖い夢を見ていたのか？」

向かいに座るジェリク様がそう尋ねてきたので、私は大きく頷きました。

「見覚えのある男性が、賊に襲われる夢を見たのです。助けたいのですが、どこの誰かがわからなくて……」

窓の外を見ると、夢で見たような景色が広がっています。

「あの、助けていただいたのに申し訳ございませんが、ここで降りしていただいてもよろしいでしょうか？ 夢で見たのはこのあたりだと思っただけです」

「こんな所で降りすわけにはいかないわ。その夢の内容は本当に起きるの？」

奥様は怪訝な表情を見せます。たしかに、私の予知夢を知らない人からすれば、そう信じがたいものですよ。

「はい。詳しくは言えないのですが、確実に起こってしまう出来事なのです。私が行けば未来を変えられるかもしれません」

「危険だから許可できない」

しかし、公爵閣下が間髪をいれずに却下しました。

公爵閣下のおっしゃることはごもつともで、命の危険がある状況に貴族の令嬢を一人で置いておく、というのは、普通の人ならしないはずですよ。

これ以上何を言っても降りしてくれないことはないか……と諦めかけた時、急に馬車が停まりました。

窓の外で護衛の騎士が忙しなく動きはじめたため、公爵閣下が御者に話しかけようと小窓を開けます。

その直後、私は馬車の中だということを忘れて、勢いよく立ち上がりました。

「大変ですー！」

背が低いので頭は打ちませんでした。公爵閣下の足を踏んづけてしまい、慌てて謝ります。

「も、申し訳ございませんー！」

「気にしなくていいよ。それよりどうした？」

「私の探している男性は、御者さんですー！」

私の叫びを聞いた公爵閣下は、一気に緊迫した表情になりました。

予知夢ではきつと、護衛の騎士たちは周りを警戒していて、行商人に扮した賊の相手を御者に任せてしまい、御者の助けに間に合わなかったのでしょうか。

公爵閣下は私から詳しい話を聞くなり、すぐに御者にその場から動かないように指示を出し、騎士たちに周囲の状況を確認させました。

すると、この道を少し行つたところに行商人がおり、リアカーが壊れて道を塞いでしまった、と言っているのだとわかりました。

そして騎士がリアカーをどかさうとすると、温和な表情を見せていた行商人がいきなり襲いかかってきたというのです。

幸い、騎士はなんなく男性を取り押さえることに成功したようで、一安心です。尋問した結果、やはりその行商人は強盗でした。

木々の陰に仲間が隠れており、リアカーの車輪が外れたので手を貸してほしいと嘘をつき、近づいてきた人を人質にしようとしたみたいです。

相手が公爵家だとは知らなかったようで、襲おうとした人が誰なのかを知った強盗団は震え上がっていました。

私が関与しなくても騎士たちが強盗団を制圧していたでしょうけれど、夢では御者の命は奪われていました。

とりあえず、助けられて良かったです！

「シアリン様、本当にありがとうございました。明らかに危険人物だとわからない場合は、私が一番に確認することになっていたので」

「治安が良い国でこんなことは滅多に起こりませんから、油断してしまいますよね」
「長年勤めておりますが、こんなことは初めてでございます」

御者は何度も頭を下げ、騎士たちもみなさんお礼を言ってくれました。当たり前のことをしていただけなのですが、胸が温かくなります。

服がずり落ちて不格好なまま応対することになったのは残念でしたが、奥様のお洋服を借りているのですから文句は言えません。

「シアリン様、このご恩は一生忘れません」
そう言って、御者は定位置に戻って馬車を動かすはじめました。

「シアリン嬢、彼を助けてくれて本当にありがとう。御者は僕たちにとって家族みたいな存在なんだ。困ったことがあったら、いつでも僕を頼ってくれ。必ず君を助けるよ」

「私も同じ気持ちよ。遠慮せずに話してね」
公爵閣下が私の右手を握り、奥様は私の左手を握って、そう言ってくれました。

御者は公爵閣下が幼い頃から公爵家に勤めている方らしく、公爵閣下だけでなく、奥様やジェリク様にとっても大事な方だったようです。

この出来事がのちに私の運命を良い方向に導いてくれるのですが、この時の私はそんなことを知る由もありませんでした。

それから二時間後。

トレッジット家のメイドが買ってきてくれた服に着替え、元の場所に戻ってみると、馬車が一台停まっているのが目に入りました。

馬車を離れた場所に停めてもらい、おそろのおそろ顔を出して確認してみます。

……ああ、いますね。

お父様が馬車の前で不機嫌そうに仁王立ちしているのが見えます。騎士に指示を出しているのを見るに、私の姿が見えないので騎士に捜さがさせているみたいです。

「迎えに来てはくれたみたいですので、帰ろうと思います」

「家に帰ったら危なくないのか？」

ジェリク様の言葉に、苦笑してしまいます。

「私はサプル殿下の婚約者です。何かあって困るのはお父様ですから、暴力をふるわれることはないと思います」

「だとしても、あの男のせいでシアリン嬢は誘拐されていたかもしれないんだぞ!? そんなことをする人の所に戻るのか!？」

「ですが、このまま家から出ても、私は一人では生きられません。それによっぽどのことでなければ、今回の件で懲こらりてくれるはずですから」

ジェリク様が心配してくれる気持ちはとてもありがたいです。

でも私はテイズ家の娘ですから、帰る家はテイズ家しかありません。

「ジェリク、お前がどうこうできる話ではない。シアリン嬢の言う通り彼女は王太子殿下の婚約者だ。彼女が望まない限り、僕たちは介入すべきではない」

「……わかりました」

公爵閣下の言葉に不服そうにするジェリク様に、私は笑顔で話しかけます。

「お気持ちには本当に嬉しいです。ジェリク様は本当にお優しいですね」

「べ、別に優しくなんか……!」

「ふふ。ジェリクが優しくするのは、シアリンだけよね」

「は、母上にも優しくしています!」

クスクス笑う奥様の横で、公爵閣下も笑みを浮かべながら口を開きます。

「君のお父上がどんな反応をするのか確認したいんだ。まず、君だけで行ってもらえるかな? 怖
いなら無理はしなくていい」

「大丈夫です。行ってきます」

元気よく答えると、ジェリク様が再び不安そうな顔になりました。

「俺も一緒に行こうか? 君が酷い目に遭ったのは俺の責任でもあるんだろう?」

「ジェリク様は悪くありません。私の話を聞いてくれないお父様が酷いのです。それに、ジェリク様と一緒にいたらきつと父は本音を口にしませんので、一人で行ってまいります」

本当はサプル殿下の発言についても話したいですが、不敬になってはいけません。



公爵閣下たちと領き合った私は馬車から降り、お父様のもとに向かいます。私に気がついたお父様は、慌てた様子で駆け寄ってきました。

「どこへ行っていったんだ！ まさか誰かにほいほいついていったんじゃないだろうな!？」

捜していた娘が見つかったというのに、開口一番がそれですか。というか、知らない人についていたのなら、こんな風に戻っては来ませんよ。

それに、服が変わったことにも気づいていないようです。

見張りを一人もつけなかったことも考慮すると、お父様は私への愛情をもう持っていないのかもしれないですね。

「そんなことはしていません。ただ、保護していただいています」

「保護だと？ お前まさか、助けを求めたのか？ 私がしたことを言っていないだろうな!？」

「言っています」

激昂するお父様をなだめるようにかぶりを振りますが、お父様の怒りは増すばかりです。

「どうせ相手は謝礼を求めてくるに決まっている！ なんて面倒なことをしてくれただんだ！ ただの躰だぞ!？」

「謝礼を求めるような方ではございません!？」

「そんなわけがない！ 誰だって見返りを求めるものだ。ほら、見てみる。近づいてくる奴がいるじゃないか。絶対に謝礼を……あ」

お父様の様子がおかしいので振り返ると、公爵閣下が笑みを浮かべて、こちらに向かってきてい

ました。

近づいてきた人が誰なのかに気がついたお父様は、顔を真っ青にして口をパクパク動かすだけで言葉を発することができません。

こんな情けない姿のお父様を見るのは初めてです。

「保護したのは謝礼目的だって？」

笑っているはずなのに氷点下の零囲気をまとう公爵閣下を前に、お父様は震え上がり、その場に跪ひざまずいて頭を下げました。

「ま、まさか、保護してくださったのがトレジット公爵閣下だとは……！ 無礼なことを言っちゃまい、大変申し訳ございません！」

「僕に謝らなくていい。それよりも、どうしてシアリン嬢が一人でこんな所にいたのか知りたいんだが、教えてくれるか？」

「む、娘と湖を見に来たのですが、用事ができてしましまして、少しだけここを離れていたのです。待っていると言ったのですが、待てなかったようで……」

「彼女は湖に落ちてしまったと聞いたけど、どこで待っているように伝えました？」

すると、お父様は目を泳がせながら、とんでもないことを話しはじめました。

「湖から離れたところで待ち、決して湖に近づいてはいけないと伝えていたのです！ じ、実は、その……お恥ずかしい話なのですが、娘は自分を傷つけることが好きなのです。苦しい思いがしたくて飛び込んだのでしょ……う」

「はい!? 何をおっしゃっているのですか!! 私にはそのような趣味はありません！」

「わかっているよ」

公爵閣下に訴えると、彼は私の頭を優しく撫でてくれました。

「テイズ伯爵。君の言うことが正しいのなら、余計にシアリン嬢を一人にさせるほうがおかしいんじゃないのか？」

「そ、それはどういうことでしょう……?」

「自分を傷つけることが好きな娘を一人にしたら、誤って死んでしまう可能性があるんじゃないか。それに、そもそも傷つけさせるべきではない。自分が忙しいなら騎士や使用人についていてもらえばきだろう」

「そ、それは、そうなのですが……」

お父様が咄とつ嗟さについた嘘ですから、もう誤魔化せないようです。

湖に落とすなんて普通の人がやることではありません。考えないようにしていましたが、公爵閣下の言葉を聞いて確信しました。

お父様は、私が死んだほうがいいと思っっているのですね。

私ほどではありませんが、お姉様も予知夢を見ることが出来ます。私に何かあっても代わりはないということでしょうか。

「彼女への対応を改善できないと言うのなら、我が家で預かる」

「それは困ります！ この子は私の大事な娘なんです！」

お父様は私を抱き寄せて叫びます。そんなお父様を、公爵閣下は蔑んだ目で見つめました。「そうは思えないが？」

「本当です！ 私の考えが至りませんでした！ 今回は……っ、今回だけは、何卒お許しください！」

「……シアリン嬢」

公爵閣下が私に意見を求めます。

お父様が私のことを愛していないのは、今回の件でわかりました。このまま家に居続けたら、殺されてしまうかもしれませんし、帰らないほうが良いですよね。

お父様はそんな私の迷いを感じ取ったのでしょうか、眉間にしわを寄せて小さく言いました。

「お前が帰らないとお祖母様が悲しむぞ」

その言葉で、私の心は、家に帰らなければ、という思いでいっぱいになりました。

お祖母様は、伯爵邸の隣にある小さな家で暮らしています。

というのもお祖母様は物忘れが酷く、私以外の人を忘れてしまったのです。

お姉様のこととは私と仲が悪くなるまでは覚えていましたが、今では「悪いことをする子は許さない！」と見るだけで怒るようになってしまいました。

そんなこともあってお姉様はお祖母様を嫌い、お祖母様につけられたお姉様に近いメイドからも冷たくあしらわれています。

お祖母様もお祖母様を疎ましく思っていたため、伯爵邸から追い出し、隣の小さな家に住まわせる

ようになったというわけです。

私がお父様に追い出され、姿を見せなくなれば、きっとお祖母様は悲しむことでしょう。家族やメイドに虐げられているお祖母様を一人ぼっちにするわけにはいきません。

「家に帰ります」

そう告げると、公爵閣下は「わかった」と言っただけで私に優しく微笑んでくれましたが、お父様に視線を移すと一瞬にして冷たい表情に変わりました。

「僕が公爵であり、国王の従弟であることを忘れるな。シアリン嬢の様子が少しでもおかしいと感じたら、どうなるかわかるだろうね」

「はっ……は、はいっ！ 今まで以上に大事にいたします！」

お父様は地面に額を擦りつけて、大きな声でそう告げます。

公爵閣下はまだ満足がいないようでしたが、ため息をつくとき再び私に視線を向けました。

「シアリン嬢、辛くなったら、遠慮しないでいつでもうちにおいで。お祖母様のことか気になるなら、一緒に来てもいいからね」

「……ありがとうございます」

公爵閣下のおかげで、この日を境にお父様が嫌がらせをしなくなることはなくなり、数日後にはお祖母様についていたメイドが替わって、とても優しい人たちになりました。

それと同時にお祖母様は誰かと文通を始めたようでした。

送り先は私の知らない女性でしたが、きつと昔の友人のことを思い出して他愛のない世間話をしているのでしよう、と考えていました。

——その相手がトレジット公爵閣下だったと知るのは、この事件から六年後のことです。

陰で私を目の敵にしていたお姉様が、予知夢を書いた私のメモをすべて奪って、今までの予知夢は自分が見たものだど嘘を言いはじめたり、それを発端に婚約破棄をされたり……

そして、ジェリク様のもとに嫁ぐことになったりと、六年後に私の人生は一気に変わるなんて、想像もしておりませんでした。

私が十七歳になった年のある日のこと。

サブル殿下はなんの先触れもなしに伯爵邸にやってきました。そして応接室で私と二人きりにさせるよう指示すると、憤怒の表情で問いただしはじめたのです。

「シアリン、ラーナから聞いたよ。君は僕を裏切って、ジェリクに迫っているらしいじゃないか」

「な、なんのお話ですか!? そんなことはしていません。ジェリク様には確認を取られたのですか?」

「学園を卒業してから、彼とは仕事でしか会っていないが……確認する必要もないことだろう」

「いえ、まずはジェリク様にご確認を——」

「どうせ聞いても、ジェリクははぐらかすに違いないさ」

サブル殿下は吐き捨てるようにそう言うと、勢いよく立ち上がりました。テーブルの上に用意されたティーカップがガシャンと音を立てます。

「父上からの許可は得ていないが、君との婚約は解消させてもらう!」

「そ、そんな!」

「ラーナからは、予知夢が見られるのが嘘だったとも聞いたよ。裏切ったのは君なのだから、言い訳など聞かない!」

「お待ちください!」

呼び止めたのですが、サブル殿下はそのまま応接室を出ていってしまいました。

そのまま殿下を追いかけると、エントランスホールに続く階段からお姉様が姿を見せました。

「殿下! どうなさいましたか?」

「ラーナ! 君がいなければ、僕はだまされ続けていたよ。シアリンの本当のことを教えてくれてありがとう」

「ま、まさか、話をしてしまったんですか?」

お姉様は目を潤ませて殿下を見上げ、殿下は苦虫を噛み潰したような表情で頷きました。

「ああ、もう我慢できなかったんだ。シアリンは君の手柄を自分のものにしただけでなく、ジェリクを誘惑するだなんて!」

「あ、あの、殿下……シアリンはジェリク様を誘惑したわけではないのです。トレジット公爵を通

じてジェリク様に近づこうとしただけなのです」

「つまり、ジェリクを誘惑しようとしたということだろう」

「それはわかりません。ただ、シアリンは嘘ばかりついて、私を貶めようとしているのは確かです。そして、ジェリク様の私への印象を悪くしようとしているのです！」

お姉様は殿下に取り入って、私をどうしようというのでしょうか。

それに、まさかこんな嘘をつくなんて！

「殿下、誤解です！ 私はお姉様を貶めようなんて思っていないません！ 予知夢が見られるのも、嘘ではありません！」

「これ以上嘘を重ねるな！」

突然、私の頬に痛みが走りました。サブル殿下が私の頬をぶったのです。

「痛いだろう？ だが、君に裏切られた僕の心はもっと痛いんだ！」

頬を押さええうずくまる私を、殿下は冷たい視線で睨みつけます。その横で、お姉様は蔑んだ目で私を見下ろしていました。

「私は殿下を裏切ってなどいません！」

「嘘つきの言葉は信じない。ラーナ、僕はシアリンとの婚約を破棄し、君と婚約できるように父上に頼むつもりだ」

「……え!?」

勝ち誇ったような殿下の言葉に、お姉様は一転しておろおろと慌てはじめました。

「あ、あの、違うのです！ 私はジェリク様がシアリンに騙されないようにしてほしいだけです！」

……そういうことですか。

お姉様は、殿下からジェリク様に私の悪口を伝えてほしかったのですね。そしてジェリク様が私を嫌うように仕向け、自分を見てもらおうと思っただけでしょう。

ですがそれは、お姉様が殿下の婚約者になってしまったら意味がありません。

「ラーナ、君は本当に優しいんだな」

「そ、そういうわけでは……」

「あの、サブル殿下！ 私の話は聞いていただけなのですか？」

ですが、そんなことはどうでもいいのです。

私が嘘をついていないことを殿下にわかってもらおうと話しかけますが、殿下は再び冷たい目でこちらを見下ろしました。

「嘘つきの話を聞いたって意味がない。僕は父上に、君との婚約を解消してラーナと婚約させてもらうよう話をしに帰る。これ以上追いかけてくるなよ、命令だ」

殿下は目を潤ませてそう答えたあと、私に背を向けて歩きはじめました。

「お待ちください！」

お姉様はそう叫び、慌てて殿下を追いかけいききましたが、追うなど言われた私は、信じてもらえなかった悲しみに溢れ出る涙をそのままに、しばらく立ち尽くしていたのでした。

その後、私は涙を流したままお祖母様の所へ行き、先程の出来事を話しました、すると、静かに聞いてくれていたお祖母様は、突然なぜか笑いはじめたのです。

「シアリンちゃんは、おバカさん！」

「……え？」

「これは王太子殿下」

お祖母様は側に置いてあつた書き損じた便箋を手にとつたかと思うと、そう言いながらクシヤクシヤに丸めました。

「お祖母様？」

「人の話を聞かず、女性に暴力をふるうゴミは、ゴミ箱にぼーい！」

そして丸めた王太子殿下……ではなく便箋を、ゴミ箱に投げてしまいました。

「シアリンちゃんにはもつと良い人がいるわ。ゴミクズのこととは忘れなさい」

お祖母様は物忘れが酷くなつてしまつていますから、貴族や王子様がどんなものか忘れてしまつて、事の重大さがわかつていないのでしょうか。

本来なら、殿下のことをそう言つてはいけませんといさめなければならぬのかもしれませんが、この時の私は、その言葉のおかげで心がとても軽くなったのです。

その日のうちに、国王陛下からサブル殿下との婚約についての書状が送られてきました。

国王陛下はサブル殿下から聞いた話を鵜呑みにしたわけではないようですが、こつても大事になつ

てしまったので、殿下と婚約を続けたくない場合は解消も応じる、と書かれていたのでした。

「どういふことなんだ！」

私を談話室に呼びつけたお父様は、届いた書状を私に投げつけて叫びました。

お姉様は談話室の中にいますが、お母様はいません。いつもならお姉様にべつたりなので、なんだか違和感があります。

「おい、聞いているのか！」

「聞いています。どういふことかはお姉様に聞いてくださいませ」

カーペットの上に落ちた書状をローテーブルの上に置きながら答えると、お父様は目を吊り上げました。

「ラーナは関係ない！ お前の話をしているんだ！」

「やめてお父様！ シアリンは可哀想な子なの！」

お姉様はお父様にしがみついて、涙ながらに訴えはじめました。

「シアリンは昔から、私のことを妬んでいたの。だから、私が見た夢を無理矢理聞き出して、私よりも優位に立とうとしたり、トレジット公爵に取り入ろうとしたりしてただけ！ 何も悪くないわ！」

「そんなことはしていません！」

「だってそうとしか考えられないじゃない！」

「何を根拠にそんなことを言うのですか！」

するとお姉様は、その場に座り込んで泣きはじめてしまいました。

「ジェリク様はもう十九歳になるのに、婚約者がいないの！ だから私は何度も釣書を送ったのに、あなたが私の悪口をトレジット公爵に言ったから、私と婚約してくれないのよ！」

「……はい？」

十九歳にもなつて泣けばいいと思っているのなら呆れてしまいますし、そもそもジェリク様を選ばれない理由を私のせいにはしないでほしいです。

「トレジット公爵閣下と連絡は取っていますが、お姉様の話題は一度も出していません。嘘だと思ふなら、どうぞ公爵閣下に確認してみてください」

お父様に伝えたつもりという言葉でしたが、お姉様が顔を上げて目を吊り上げました。

「どうせあなたがお願しているせいで、公爵閣下はあなたから何も聞いてないって言うに決まつてるわ！」

「それなら、それが誤解だと訴えればいいじゃないですか。何が誤解なのか聞き返されるでしょうけど」

「ならば、私が聞いてみることにしよう」

お父様がそう言いますが、お姉様は激しく首を横に振ります。

「トレジット公爵にそんなことを聞いたら、お父様がまたシアリンをいじめていると思われてしまうわ！」

「そ、そうだな。それは困る」

お父様はあの時以来、公爵閣下の名前を聞くだけで震え上がるようになりました。今も、眉尻を下げて情けない表情です。

お姉様も、公爵閣下に連絡を入れられたら自分の嘘がバレるからか、必死ですね。どうせいつかはバレる嘘です。足掻いたって無駄ですのに。

「シアリン！ 今ならサブル殿下と婚約者のままでいられるんだ。婚約解消を取り消してもらおう殿下に謝りなさい。お前が殿下と結婚すれば、かなりの金額が結納金として支払われるんだ。それは我が家を支える重要なお金なんだぞ！」

殿下が私の話を聞く素振りを見せなかったり、私の頬を打ったりしなければ、私はお父様の訴えを素直に受け入れていたでしょう。

ですが、あの行動で私の心は冷めました。

殿下のことをこれまで何年も思い続けてきました。彼との幸せな未来を何度想像したことでしよう。

でも、もうやめます。お祖母様の言う通り、彼を好きだった気持ちをゴミ箱にポイします。

それにしても、お父様は結納金が目当てなのですね。

……それなら、これならどうでしょう？

「あの、提案があるのですが」

「……なんだ」

「サブル殿下はお姉様との婚約を望んでおられました。お姉様には婚約者がいませんし、サブル殿

下とお姉様が婚約すればよいのではないのでしょうか。結納金もいただけますし」

「なんだって!？」

お父様はすぐさま目を輝かせて、うずくまるお姉様を抱き寄せました。

「ラーナ、すごいじゃないか! 殿下に認められたんだな!」

普通なら喜ぶべきところなのでしょうが、お姉様の目的はサブル殿下に認められることではありませんから、一気に焦りはじめました。

「わ、私には王太子殿下はもつたいなさすぎます!」

「謙遜けんそんしなくていい。嘘つきのシアリンよりも、お前のほうがよっぽど殿下に似合うに決まってる」

「お姉様、私もそう思いますわ」

私もにこりと微笑むと、お姉様は立ち上がって叫びました。

「私はジェリク様を愛しているの! サブル殿下と婚約なんてしません!」

「何を言っているんだ。公爵令息よりも王太子のほうがいいに決まっているだろう」

戸惑うようにお父様は続けます。

「それに予知夢を見られるのはお前だけで、シアリンが嫁に行けば嘘がバレてしまうんだ。そうなったら私たちもどうなるかわからない。それなら、予知夢を見られるお前がサブル殿下と婚約するほうがいいんだよ」

お姉様も昔は予知夢を見ることができましたが、今はどうなのでしょう。まだ少しでも見られ

るのであれば、嫁いでも誤魔化せるでしょう。

国王陛下には真実を伝え、婚約については解消したいと連絡しましょう。

ああ、忘れてはいけません。サブル殿下の婚約者には、私よりもお姉様のほうがいいとも伝えなければいけませんね。

乗り気のお父様を必死に説得するお姉様を滑稽こっけいに思いながら、私は黙って部屋を出ました。

国王陛下への手紙は落ち着いた環境で書きたいですから、お祖母様の所に行きましょう。そう思った時、ふと気になることがありました。

お母様は今、何をしているのでしょうか。あの場にお母様がいなかったことが、やはり気になっできました。ふと嫌な予感がして、ひとまず自分の部屋に戻ることになりました。

部屋に入るなり、何か変なことが起きていないか確認します。

ぱっと見た限りでは特に何もなかったのですが、よくよく調べてみると、私が予知夢をメモしていた紙の異変に気づきました。

異変といっても並べていた順番が違っていただけです。今までの私なら『こんな並び方にしていただいしょうか』と考えるだけで気がつかなかったでしょう。そもそも鍵のかかった引き出しに入っていたのですから。

ですが、今ならわかります。誰かが鍵を入手して開けたのです。

そしてその誰かとは、お母様なのでしょう。

お母様は昔から、特にお姉様を可愛がっていました。

お姉様が予知夢を見られるというのは嘘だと気づいていたはずですが、それを叱ることはせず、逆に味方していたのかもしれない。私がお祖母様の所に行っている間に、こっそり部屋に忍び込んで紙を見ていた、というのが一番考えられることです。

……もう、どうでもよくなってしまいました。私がこの屋敷にいる間は、私がメモした紙を盗み見れば、お姉様が予知夢を見られると誤魔化せるでしょう。

ですが、いつかはお姉様がこの家を出るか、私がこの家を出る日が来ます。そうしたらどうするつもりなのでしょう。今から楽しみになってきました。

予知夢を書いた紙をここに置いておかなければいいのですが、私が気づいたことを知られたくありません。

とはいえ、お母様たちを欺くために嘘を書くと、予知夢で見た人を助けられなくなってしまいます。

私は予知夢を見ることができると引き続き訴えますが、お姉様にはこのまま嘘をつかせてあげましょう。

そう考えだすと気持ちが軽くなって、私は笑顔でお祖母様のもとに行きました。

婚約を解消することになったと伝えると、お祖母様は満面の笑みを浮かべて、拍手ははじめました。

「シアリンちゃんは、ゴミを捨てられて偉い！」

「ありがとうございます。お祖母様のおかげです」

お祖母様がいないければ、サプル殿下との婚約の解消に踏み切れずにいたでしょう。

手を取ってお礼を言うと、二人きりの部屋だというのにお祖母様は私の耳元に顔を寄せ、小声で話しはじめました。

「あなたとサプル殿下の婚約が破棄されたあと、リブレット男爵という人から釣書が来るわ。息子たちのことだから、男爵という爵位だけ見て、相手を蔑んで、あなたを嫁がせようとするでしょう。でも、その人のところに嫁ぎなさい」

「え？ あ、あの、お祖母様？」

いつものお祖母様と様子が違うので驚いていると、お祖母様は温和な笑みを浮かべました。

「今まで騙っていて、ごめんなさいね」

その話しぶりは、明らかに今までとは異なり、健常のものでした。

もしかしてお祖母様は、物忘れが酷くなったふりをしていたのでしょうか。何度もご飯の要求をしたり、夜中に家から出て徘徊していたりもしましたが、それが演技だったというのなら驚きを隠せません。

「お祖母様、どうして今までそんなことをしていたのですか」

「ジェリク様に恋をしてからのラーナは、信じられないくらいワガママになってしまった。それを止めない息子夫婦に注意をしても、厄介者扱いされるだけ。あなたを守るには、こうするしかなかったのよ」

お祖母様は、お母様の本音を聞き出すには、物忘れが酷くなったふりをしたほうが油断すると思っただけです。

その作戦は成功し、お祖母様が聞いたとしてもすぐに忘れてしまうから何を言っても大丈夫、とお母様はお祖母様に直接悪口を言っていたのだとか。

お母様のことでですから、きつと私のことも悪く言っていたのでしょう。

なんだか頭が痛くなってきました。

そういえば、お祖母様がずっと文通をしている相手の姓が、たしかリブレットでした。釣書を送ってくるその方とお知り合いなのでしょうか？

「ところで、私はリブレット男爵を存じ上げないのですが、どんな方なのですか？」

するとお祖母様は私の手を撫でながら、ゆっくりと口を開きました。

「ある人があなたのために授かった姓と爵位なの。いつか来るかもしれないこの日のために、ずっと前から用意していたのよ。元の姓だと、ラーナや息子たちが確実に邪魔をするはずだからね」

お姉様やお父様たちが邪魔をしたくなる相手……となると、ジェリク様でしょうか。ジェリク様からの婚約の申し込みがあったら、絶対にお姉様から邪魔が入りますものね。

でも、ジェリク様が私を妻に迎えたいと思う理由がないはずですから、おそらく違うはず。

となると……リブレット男爵は一体誰なのでしょう。

「リブレット男爵が誰なのかは、教えてもらえないのですか？」

「教えてもいいんだけど、せつかくだから会ってみてのお楽しみにしましょう！」

そう言うと、お祖母様は右手の人差し指を口に当てて、ふふふっと可愛らしく微笑んだのでした。

最終的に私の望みが通り、私とサブル殿下の婚約は破棄となりました。

なぜ解消にならなかったのかというと、今回の件はサブル殿下に非があると国王陛下が判断したからです。

国王陛下は、サブル殿下がお姉様の言葉だけを信じ私の話を傾けなかったこと、そして私の頬を打ったことについて、一国の王太子が取るべき態度ではないと判断したのです。

さらには慰謝料として、サブル殿下に与えられていた婚約者のために使う費用をくださることになりました。

そのお金はすべて、父に奪われることになりましたが……

私とサブル殿下の婚約が破棄されたことは、瞬く間に貴族の間に知れ渡りました。

しかし、貴族の間で広まった婚約破棄の理由は、サブル殿下がお姉様を愛してしまったことと、予知夢を見ることができるとは私ではなく、本当はお姉様かもしれないから、でした。

どうしてそんな噂が広まったのか。

それはお姉様が聞かれてもいないのに、友人たちに泣きながらそう話したからです。

サブル殿下がお姉様を愛してしまったのは嘘ではありません。つまりは向こうの浮気ということ

立ち読みサンプル はここまで

になりますので、私には大して影響はありません。

問題なのは、予知夢のことです。

お母様が私のメモを盗み見てお姉様に教えたからか、お姉様は次々と未来を当てました。

その頃私は助けられそうな人を助けるために動いておりましたし、お姉様がペラペラ周囲に話していましたので、わざわざ真実を公言することはしませんでした。

するとどうでしょう、周りは私が姉の予知夢を聞いて動いている、と言うようになったのです。妹のために自分を犠牲にしていると思われることになったお姉様のもとには、たくさんの釣書が届けられました。

ですが残念ながら目当てのジェリク様からのものではなく、釣書の山を前にお姉様は苛立ちを隠してきました。

「予知夢を見られるのは私なのに、どうしてジェリク様は私に求婚してくれないの……」

お父様の命令で、夕食を家族全員でとることになった場で、お姉様は食事を前に嘆き悲しみました。そんなお姉様に、お母様が優しく話しかけます。

「ラーナ、泣かないで。あなたはたくさんの人に愛されているじゃないの。シアリンなんか一人も求婚してくれる人がいないのよ」

「お母様、そんなことを言っては駄目よ。シアリンが可哀想だわ」

二人は向かいに座る私をにやついて見ながら、そう悪口を言います。
とはいえ、私が嫁に行つて困るのはそちらだと思えますけどね。

内心でため息をついていると、お父様が咳払いをしたあとに口を開きました。

「実は、シアリンにも一人だけだが、釣書が届いた」

「「ええっ!?!」」

お姉様たちの驚く声が見事に揃いました。

「リブレット男爵とかいう名の知られていない貴族だな」

「まあ、男爵ですって!」

お母様が嘖き出し、お姉様は哀れみの目を私に向けてきます。

「この前まではサブル殿下の婚約者だったのに、今度は男爵の婚約者だなんて……。シアリン、気を落とさないでね」

勝ち誇った様子のお姉様に、私は余裕の笑みを浮かべて答えました。

「お気遣いいただきありがとうございます。お姉様も、ジェリク様から永遠に求婚されないことに気を落とさないでくださいな」

「な、なんですって!?!」

お姉様は顔を真っ赤にして怒りはじめましたが、私は目の前に置かれたコンスープを口にしながら他のことを考えはじめました。

お祖母様の言った通り、私のもとにリブレット男爵を名乗る方からの釣書が届きました。

リブレット男爵のところにお嫁に行くようお祖母様は言いましたが、お祖母様を残して行くわけにはいきません。